

特集

日本の周産期事情 update —出生コホート研究からわかったこと—Ⅱ

企画者のことば

西郡秀和*

出生コホート研究とは、胎生期と出生後の環境がどのように児の発達に影響を与えているかを明らかにする観察研究である。したがって、妊産婦の食生活、健康状態や疾病についても調査が行われている。日本では、複数の出生コホート研究が行われており、これらの知見に基づいたわが国独自のエビデンスが蓄積されてきている。本特集では、前号に続き、日本の出生コホート研究(前向き研究)などから得られた最新の知見を中心に紹介していただいた。

執筆者には、疫学・統計の専門家でない読者にもわかりやすい文章で紹介、研究手法や解析結果の限界、そして今後の課題なども提示していただいた。われわれは、海外や過去の知見を参考にしつつも、【現代の日本】における食生

活・医療事情などの環境要因や人種による遺伝素因の違いを考慮した、わが国独自のエビデンスに基づく周産期医療を展開する必要がある。これらを踏まえて、特に若手の産婦人科医が、日本で行われている出生コホート研究などに興味を持ち、現場での疑問や柔軟な発想で、これらのビッグデータなどの解析に携わり、わが国独自の周産期医療エビデンス構築に向けて、さらなる成果を出していくことを強く期待する。また出生コホート研究は、調査対象者の理解と協力のもと行われている。したがって、これらの成果を社会に啓発して還元する必要がある。本特集がその一助となれば幸いである。

本テーマの企画を実現していただいた本誌編集委員会と執筆者のかたがたに深謝いたします。

*H. Nishigori 福島県立医科大学ふくしま子ども・女性医療支援センター発達環境医学分野(教授)